

自動車産業を中心に活況が続く東海地区。愛知県の有効求人倍率は2倍前後で推移し、中小企業は人材確保に苦勞している。そこに団塊世代の退職時期が重なり、技能伝承は大きな課題となっている。こうした中、名古屋工業大学がトヨタ自動車グループの協力を得て、中小製造業の工場長クラスの人材を育成する「工場長養成塾」を事業化、9月に開塾した。現場実習を中心に現場改善力の習得を目指す。24社の募集に34社が応募、中小製造業

## 産学連携で「工場長養成塾」

# 中小の現場改善力を向上

の期待は大きい。

### ■講師にOB・現役

同塾は、名古屋工大が豊田自動織機やデンソー技研センター（愛知県安城市）と共同で、06年度に実証講座として実施したカリキュラムをベースに事業化した。「工場長は製造現場で何に目を光らせるべきか」などがテーマ。豊田自動織機やデンソー技研センターのOBや現役の技術者を非常勤講師に招き、現場のムダ、ムリ、ムラを「見える化」して取り除くスキルを学ぶ。半年近い期間を要するうえ、受講料50万円の負担も

ある。それでも製造現場の「見抜く力」養成

### ■「見抜く力」養成

中核人材を育成したい中小製造業は多い。後継者が育たずに経営者の高齢化が進んでいること、現場の繁忙が続いて人材育成がままな



ムダ・ムリ・ムラを「見える化」し取り除くスキルを学ぶ

を中心に、印刷会社なども参加。工場が近い企業4社で1グループになり、各社の工場を持ち回りで訪問。現場を整理、整頓して問題点を見つけることに始まり、工程管理や原価低減、人事管理に生かすノウハウまで学んで、経営センスを磨く。

塾長の仁科健名古屋工大教授は「受講期間中に成果を出すことに集中するより、現場の問題を見抜く力をつけて、多くの事例に応用してほしい」と、塾の狙いを強調する。名古屋工大での座学でも、現場の事例をできるだけ用いて議論する。原理、原則優先の講義内容では、話が抽象的、一方的になるからだ。現場事例を題材に、双方がより具体的に議論し、検査工程の効率化や段取り替えの時間短縮など、現場を改善するための技術をきちんと身につけてもらうことを目指す。応募した34社の中から、意気込みなどを参考に絞り込まれた24社が集まるだけに、内容の充実が期待できる。今回は、名古屋工大と包括協定を結ぶ愛知銀行や大垣共立銀行が協力し、取引先の中小製造業を紹介した。今後は他の金融機関や行政機関、経済団体ともパイプを作って受講生を確保、08年度以降も継続する方針だ。

## スキルを継ぐ

### 暗黙知の移転